

江馬 耕太郎

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



印刷の街

明治時代の仙台は、県庁所在地として、さらに東北の中心的都市として、さまざまに役所が置かれました。さらに「学都」や「軍都」と称されたように、市内には多くの教育施設や軍関係施設がありました。これらの役所や学校、軍の施設では、テキスト、事業報告等々、業務の遂行に伴って様々な印刷物が必要となりました。そのため、こうした施設の設立が進む明治二十年代以降、仙台市内には次々と印刷所ができるようになったのです。

大正十五（一九二六）年の統計を見てみると、印刷工場の数は一九で、醸造業（二〇）に次いで二位。従業員数は四五五人で、製糸業（二二〇七人）、醸造業（五〇七人）に次いで三位でした。同年の工業生産額は、醸造業（約八二〇万円）、製糸業（約三八〇万円）、印刷業（約二二〇万円）、「染色整理其他加工業」（約一〇〇万円）の順で、それに次ぐのは菓子製造業の五〇万円余。このように、明治次代後期から大正次代にかけて、印刷業は仙台の主要産業の一つだったのです。

印刷業界の先駆者

このような仙台の印刷業を支えた人物の一人に、江馬耕太郎がいます。万延元（一八六〇）

年に仙台藩下級藩士の家に生まれた耕太郎は、明治維新後に家禄を失い困窮する家計を助けるため、十四、五歳のころから宮城活版社の見習い工員となりました。

この宮城活版社は、明治五（一八七二）年に須田平左衛門が設立した印刷所で、県の布告類や教科書などを印刷し、市内ではいち早く活字を導入したことで知られています。

その後、耕太郎は須田が創刊した『徳台新聞（後に『仙台日日新聞』と改称）』の植字工となりました。ただし、職人としてだけではなく、編集や執筆などにも関わったようです。

そうしたこともあってか、明治十一年五月に須田が突然の自決を遂げると、同年十一月から耕太郎は「仮編集長」として『仙台日日新聞』の発行を主導することになります。しかし記事の内容をめぐって当局の処罰を受けた耕太郎は、翌年二月に『仙台日日新聞』を離れ、自由民権運動と関わりの深い『宮城日報』に移ったのを皮切りに、宮城活版社への復帰、『奥羽日日新聞』への参画など、印刷技術者、また言論人としての活動を続けました。

欧南遣使考

山形に在住していた明治二十年代前半、江馬耕太郎は法律書や大衆向け読み物などの編

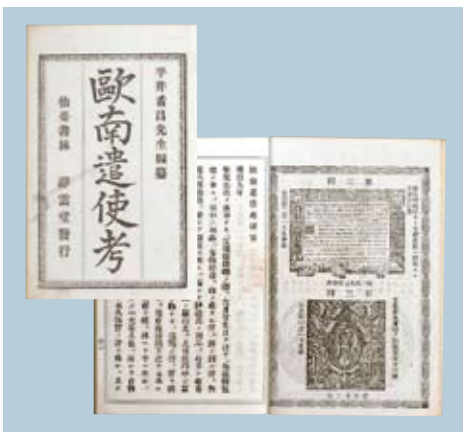
集、出版を手がけていました。

そして明治二十四年、仙台に戻ってきた耕太郎は江馬活版所を設立し、一冊の本を印刷します。『欧南遣使考』です。外交官として知られる平井希昌が、支倉常長の事跡をまとめたもので、明治九年に東京で出版された後、明治十五年に宮城活版社から再版されました。しかし、いずれも出版部数が少なく、人目に触れることは多くありませんでした。

耕太郎が手がけた『欧南遣使考』は、新たに活字を組み直し、洗練された紙面となりました。また元版では別に作った印画紙を貼り込んでいた図版を、精細な線描で鮮明に印刷したのも、印刷物としては画期的でした。

当時、仙台で最大手の本屋であった伊勢安書店が発行所となって再版されたこの『欧南遣使考』は、市内六つの書店で販売され、慶長遣欧使節の事跡を広く人々に知らしむるのに、大きな役割を果たしたのです。

この『欧南遣使考』を皮切りに、仙台でも有数の技術を持つ印刷所として江馬活版社は、数多くの印刷物を手がけ、仙台の印刷業の発展に大きな貢献を果たしたのです。



明治24年に江馬活版所が印刷した『欧南遣使考』

仙台市史

特別編8 慶長遣欧使節

慶長遣欧使節の全てを集大成

伊達政宗の外交使節・支倉常長の足跡が明らかに！

- ◆B5判 630頁
- ◆オールカラー
- ◆定価 6000円(本体 5714円)



支倉常長像(仙台市博物館所蔵)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館／株式会社宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074